

## 巻頭言

## 年頭所感



所長 鈴木 基之

Motoyuki  
SUZUKI

明けましておめでとうございます。この新しい年が皆様方には良い年となることをお祈り申し上げます。

昨年は、地球環境問題に関してはリオの世界会議(1992)の5年後の時期として、COP3が京都において開催されるなど、関心の高まりが見られたところではありますが、一方において大規模の森林火災、これに伴う飛行機事故など、地球規模の環境問題と無縁ではない痛ましい事象も起こった年でありました。後半は国際的には、アジア諸国の経済不安が顕在化するとともに、国内では一部の金融界の破綻など、一般市民の常識を超えるようなことも起こり、種々のシステムの脆弱さを顕わにすることとなりました。今後もしばらくの間は相変わらず色々困難な状況が継続すると思われる環境にはありますが、我が国においては、行財政改革を始めとする諸改革、規制緩和の方向の諸施策など、多くの面で一時的な痛みを覚悟の上で21世紀を迎える準備が進められ、これは是非、効果をあげていくことが必要でありましょう。このような変化、変動の状況は、大学においてもまた研究所としても無縁ではなく、より長期的視野、深い洞察の上に21世紀におけるその姿を提示し、社会的に、また国際的にも十分な責任を果たしていくための改革を行っていかなくてはなりません。

生産技術研究所は教官一人一人が責任を有する研究室がそれぞれ独自性を出し、個々の責任において研究テーマの選定、各個研究の推進を図ると同時に、将来の社会ニーズに応えるプロジェクト性の高い共同研究を専門の枠を超え、所外の研究者も含めて自由に組織し、工学研究の中心的機能の一翼を担うべき責任を有しております。個性溢れる100に近い研究室が一つの組織の中に存在するメリットを将来の人類のために活かしていく為には個別のディシプリンを発展させつつ、広く社会のニーズに対応して柔軟な研究体制を組める組織でなくてはならないでありましょう。

今後の世界におけるニーズの例として、人口増大に対応する、食料生産の限界、資源の有限性の制約をどのような形の開発でカバーするのか、健康で安全で充実した生活を保証するシステムはどのようなものであるべきか、などを提示することを考えると、そのための科学技術を創造する知恵と力をどのように生み出すのかという視点から我々の研究活動の方向を決め、将来の着地点を示していくことが求められるでありましょう。我々、各研究者は、個別のテーマの選定において特に、何故そのテーマが重要なのか、今何故我々がこのテーマを、このようなやり方で取り上げるのかなど、本所の研究活動として明確なアカウンタビリティを社会に示すことが必要でありましょう。その研究の成果が世に問われるのは3年後、5年後、10年後でありましょうから、当然そこには将来の状況の明確な予測がなされていなくてはなりません。ところが、研究対象が従来分野の枠を超える場合には、言い換えれば新しい学問領域を創設しようとする場合にはなかなか客観的な将来予測は

難しく、孤独な決断を行うこととなるでしょう。しかし、これこそが我々に求められている責務であり、いわば全人格を投入して考えていかななくてはならないことと思います。

このような研究面での活動は勿論として、社会に開かれた活動は、大学院教育、高度研究者育成、それらを通じての産業界との連携、国際連携の面でも同様な認識のもとに、ますます発展させていく必要があります、この点でも広く周囲の方々のご協力を頂くことが必要です。

本所においては、平成7年度から3回にわたる外部評価を頂くことが出来ました。即ち、国際パネル(座長 Tien カリフォルニア大学学長外4名)、産業界パネル(座長山本卓真富士通会長外12名)、学術パネル(座長猪瀬博学術情報センター長外5名)としてそれぞれ経験豊かな権威の方々に本所の活動の総合的なあり方をご覧頂き、本所の将来計画に関するアドバイスを3方向から頂くことが出来ました。この3つの報告書をもとに、今後は所の組織、運営などの具体的な将来像を詰めて、その実現を図る段階に入っていきます。早急に具体化できるもの、例えば所内活動に関する情報の一般開示の活発化、産学協力の推進を一層図るためのシステム作りなどなどは速やかに実現を図ると共に、長期的な本所のあり方に関する将来構想を具体的に詰めてまいります。

現在、本所は駒場(II)キャンパスへの移転の実行段階に入っております。この駒場移転は完成の暁には、本学の先端科学技術研究センター、国際・産学共同研究センターとともに、同一キャンパスにおいて、我が国の科学技術の研究体制を構成する大きな要素として機能するものと考えており、この移転は早期に完結することが望ましいものです。建築・移転経過の時期には所として数多くの苦勞も予見されておりますが、本所全体としてのこれまでのインテグリティを大きな力にして、これに対応していく所存であります。是非、皆様のご支援をお願い申し上げます。